

特殊報第1号

各関係機関団体の長
各病虫害防除員 殿

福岡県病虫害防除所長

平成24年度病虫害発生予察特殊報第1号について

このことについて、病虫害発生予察特殊報第1号を発表したので送付します。

1 病虫害名 トマト黄化病：*Tomato chlorosis virus* (ToCV)

2 被害作物 トマト

3 発生確認

平成24年5月中旬にみやま市高田町の施設栽培トマトにおいて、中位葉の葉脈間の退緑黄化症状や、病徴の激しい株で、葉巻・褐変症状が認められた。

平成24年5月21日に採取した罹病株を九州沖縄農業研究センター上席研究員大貫正俊氏に診断を依頼した結果、病徴とRT-PCR、塩基配列の解読結果から *Tomato chlorosis virus* (ToCV) によるトマト黄化病と同定された。

4 国内での発生状況

トマト黄化病は国内では、栃木県(H20年8月)、群馬県(H22年3月)、熊本県(H23年5月)、鹿児島県(H23年10月)で発生が確認されている。

5 病徴及び伝染方法

(1) 病徴等

- ① 発病の初期には、葉の一部の葉脈間が退緑黄化し、黄斑を生じる。
- ② 症状が進展すると葉脈に沿った部分を残して葉全体が黄化し、葉巻症状やえそ症状が現れる。
- ③ 下位葉で比較的重症化する傾向があり、症状は生理障害(苦土欠乏症)に似る。
- ④ 発病株は生育が抑制され、収量が減少する傾向が見られる。

(2) 伝染方法等

- ① 本ウイルスはクリニウイルス属のウイルスで、タバココナジラミ(バイオタイプB及びQ)及び、オンシツコナジラミによって媒介されることが確認されている。
- ② クリニウイルス属のウイルスでは経卵伝染、汁液伝染、土壌伝染及び種子伝染はしない。
- ③ 半永続伝搬であり、ウイルス媒介能力は数時間から数日間持続される。

6 防除対策

本ウイルスもトマト黄化葉巻ウイルスと同様にコナジラミ類により媒介されるため、基本的な防除対策はトマト黄化葉巻病と同じ以下の対策を実施する。

(1) 無病苗の確保

苗を購入する際は、ウイルス感染やタバココナジラミの寄生がない苗であることを確認する。

(2) コナジラミ類の侵入防止

育苗ほ場や栽培施設の天窓やサイド等の開口部には、0.4 mm目合い以下の防虫ネットを使用することが望ましい。特に、出入り口のカーテンは二重にして、開放状態にならないように注意する。

(3) 粘着トラップによるコナジラミ類の確認

ハウスの内側に黄色粘着シート（ITシート等）を設置し、コナジラミの発生状況を把握する。

(4) コナジラミ類の防除

育苗～生育初期のコナジラミ類の防除に努め、定植前に必ず粒剤処理を行い、初期の感染防止を徹底する。その際、同じ種類（系統）の薬剤使用を繰り返すと抵抗性が発達するので、系統が異なる薬剤のローテーション散布を行う。

(5) 発病株の除去

発病株は、見つけ次第速やかに除去し、土中深く埋没する等適切に処分する。

(6) ほ場周辺の雑草の除草や野良生えトマトの管理

ほ場内外の雑草はコナジラミの増殖源になり得るので除草を徹底する。また、植物の残渣及び芽かきした茎葉や不良果から派生する野良生えトマトは、感染源になるので、速やかに処分する。

(7) 栽培終了時の蒸し込み

施設栽培が終了したら、株を切断して枯死させると同時に、ハウスを密閉して蒸し込み（約50℃で7～10日間程度）作業を行い、コナジラミを死滅させて、ウイルス保毒虫が施設外へ移動するのを防ぐ。



図1 ほ場での発生状況



図2 葉の黄化とえそ症状